

「誰」を見て、仕事をするのか？～MCWを見て～

令和7年7月17日

マイコーデウィークと、野球部の活躍&野球応援の取組

『東大生はなぜコンサルを目指すのか』著レジー（2025）集英社新書では、「今の社会における過度な成長圧力」が書かれている。「この先どうするのですか？」という問いに対峙する心構えを著者は解いていると思う。そこでは、個人の成長なのか、社会の成長なのかとかではなく、今の自分を大切にするような投げ掛けにも読めた。本校で、1学期末テスト最終日から終業式まで（毎学期）、生徒に自分の服装を考えてよい「**柔軟な服装週間**」＝My Coordinates Weeks（マイコーデウィーク）を始めた。これは、TPOを自ら考え、自分で行動していく、教職員はそれ支えるという取組である。

7月5日本校の野球部の熱い試合があった。野球部の生徒、監督、部長、保護者、地域の方々、OBは本当に私には、計り知れない悔しさを抱えているだろうと推察する。すべての生徒に言えることだが、生徒のひたむきな姿は、心をうつ。そして、この清水ちゅーるスタジアムで、応援に参加した生徒、教職員が熱中症などなく健康（疲労はしていますが）で終えたことに、心から感謝したい。

私は、この2つの取組から、大変大きなことを学び、あらためて、学校は、誰を見て仕事をする場所かを考えさせられたので、皆様に発信しておきたい。なぜか。

まず、「マイコーデウィーク（MCW）」。この取り組みは、制服か、私服かを将来的に選択する議論をしていない。

今後、各家庭の経済負担等を考え、この議論はあるかもしれないが、今回は異なる。今の学校教育の中で、特に生徒の自主性、「生徒の自主的な行動」を、自ら考えて、自ら選択できることについて、一体どれだけ取り組んでいるだろうか。ある程度、教職員の考える範囲内で生徒に考えさせているに過ぎないのではないかと思う。

この取組を始め、生徒は、毎朝「今日はどんな格好にしよう？」「暑いかな？」「今日は放課後部活あるかな？」「今日はどんな授業があるかな？」「友達はどうな服で来るかな？」「これでは目立ちすぎるかな？」ということを考えるそうだ。これは、教職員が、生徒を信じるとともに、生徒に日常的に指導してきたことを信じないといけない。そしてそれをできる生徒がいる。終業式には、制服をビシッて着てこられるか、二学期以降の授業時には、しっかりとした制服で学校生活が送れるか、楽しみでならない。これを繰り返して、学校生活における、それぞれの「装い」とは何かを、考えていきたい。「猛暑という地球規模の変化」についてもである。

野球応援を見た。1年生は原則全員応援（必要に応じて不参加可能）、2年生、3年生は希望者応援。応援団、吹奏楽部は、猛暑の中、本当にありがたう。彼らは、「野球部の仲間」の頑張りに応えている。誰よりも、仲間を見ている。そして、応援にきた生徒に私は、本当に驚いた。ある1年生男子は、大きな声で、「もっと声出そうぜ!!」「もっと頑張ろうぜ!!」と1年生同志で声を掛け合っている。ある1年生女子は、「吹奏楽部の子たち頑張っているから、私たちも頑張らなきゃ!」と声を出す。そんな学校は今まで、見たことがなかった。今は、思っているもそういうことができない社会になりつつある。そして、猛暑の中、その生徒たちに、ミストポンプで水を撒き続ける教職員!2時間ずっと生徒に水をかけ続ける光景を見て、胸にくるものがあつた。こんな教職員集団あるのかと、思い出すと涙が出る。そして、悔し涙をする野球部員。多くの学校が、様々な理由でこのような応援形態を控えている。しかし、学校は、それぞれ学校、生徒の実態があり、これを単純に「やめれば良い」などと判断はできない。部活動同様、教育課程に位置づけできていない学校の取組は、教員の一存ではなく、生徒、保護者、OB、CS等、様々な意見を傾聴したい。私たちは、「誰」を見て、仕事をするのか。生徒が見せるその姿、その一つ一つの表現に、その価値はどこにあるのか大人の価値観ではなく、その学校教育の意義をみなさまと一緒に考えてほしい。



「授業をみる」ことを通して、生徒一人一人の学びを想像するⅡ

一人一人が本能的に持つ「学びに向かう力」を引き出せたら嬉しいという前回の通信の流れで、もう少し授業参観について、書きます。山田先生「課題研究」（企業研究）、市議会議員による地域連携を意識した授業である。ゲストティーチャーを招く授業は案外難しく、授業の意図をどれだけゲストに伝えておくかが大切になる。その意味で、先生のねらいに沿って、市議は、自ら語るのではなく、グループワークに入って、「行政の視点」を与えてくれていた。鈴木比呂美先生「古典探究」、方丈記「ゆく川の流れ」の読解。あるじとすみか、そして朝顔の露。無常をしつとりとイメージさせていく流れを、あるじは、「何の主人？」という問い掛けからラストに持っていかれた。生徒ほぼ全員の顔が問いて、ハッとさせられる瞬間に立ち会えた。金崎先生「日本史探究」、幕藩体制の動揺の単元。単元構成を明確にし、それまでの登場人物になりきって、日記を書かせ、それを相互に鑑賞するという授業。生徒が当時の歴史人物になりきって日記を書いている、大変興味深く、生徒間で自分たちの書いた文章を読み合うと、生徒の歴史に対する気づきも印象も全く異なるということがよくわかった。改めて、授業は面白い！本校は、これからも授業を大切に、生徒の未来を見つけられる学校でありたい。

富士山と熱中症

富士山は、夏に見えにくい。「確かに、そうだな」と毎朝、富士山を見上げている。まさに、南からの暖かい風（空気の流れ）によって、上昇気流が発生しているのだろう（右写真）。その暑苦しさな富士山を見て、いつも、熱中症が気になる。本校では、「富士宮北高校熱中症予防活動指針」を定めている。定期的に暑さ指数を計測・記録している。ぜひ、生徒のみなさんも、熱中症対策は誰かが用意してくれるのではなく、自分の管理が大切なのだと学んでほしい。



【ちょこっと紬】関税は誰に払うのか？消費税は何に使うのか？

7月8日、アメリカ合衆国、トランプ大統領が、日本に対する関税率を25%にするとの書簡を、日本の石破首相宛に送ったとの報道があった。社会的な評価は、さておき、トレンドワードの「関税」。関税は、誰が、誰に支払うのでしょうか。関税は、国境や国内の特定の地域を通過するときに課される税金だが、この税金は、国を出たり入ったりする時に発生する、つまり、最終的に輸出する企業などが、アメリカという国に税金を支払うことになる。

例えば、「ある日本酒業者T」が、日本酒をアメリカに輸出したいと思うと、アメリカの指定した関税が25%であると、日本の業者は、お酒を10000円で売りたい場合、アメリカのアルコールを販売してくれる業者に10000円を買ってもらうが、アメリカという国にも2500円を支払う。したがって、日本の業者は、12500円で売らないと損をしてしまう。そして、この2500円分の徴収をするのが「税関」である。このように関税は、相手の業者ではなく、国税としてアメリカという国に支払うことになり、この納められたお金を使って、アメリカの国の産業等のために使うという流れとなる。それでいうと、アメリカの業者は日本製のものが高くなったというだけであり、アメリカ政府の使える予算が増えたということになる。（では、通信料、通販はどんな流れ？授業で聞きたい）

消費税についても、選挙の争点の一つになっているので、確認してみる。消費税というのは、消費税法で決まっている税金である。その第一条で、消費税がかかる対象を決め、その税金は「年金、医療、介護と、少子化に対処する施策」にのみ使うとされている。そして、その税収は国と地方で分けるとする。

例えば、ジュースを1本100円で、10%の消費税であった場合、消費者は110円で買う。この10円のうち、8円は国、2円は地方へ。そして、国、地方は年金などや、子育て支援金などに振り分けられるということである。消費税というのは、使い道がしっかり決められているので、他にはほぼ使うことができません。

もうすぐ参議院議員選挙。私たちは、授業を通して、このように、社会に出たときにしっかり考えることができる生徒たちを育てようと日々授業に取り組んでいる。